



秋の牟礼村

## 今、牟礼<sup>むれ</sup>の文化を考える

はじめに

皆さん今日は、ただ今ご紹介にあずかりました笹本です。しばらくの間、お付き合いください。

ここにお集まりの皆さんの多くは牟礼村にお住まいです。私たちがこの地域、あるいはこのふるさとに生きる意味はどこにあるのでしょうか、私たちにとって牟礼村はどのような意義を持っているのでしょうか。皆さんは、こんな当たり前のことを真剣に考えたことがありますか。

牟礼村がどんな魅力を持っているのかを知るとは、ここを舞台として生きている私たちがいかなる人間なのかという、自己認識につながります。多くの皆さんは自分が住んでいる村について、様々な文化なども当然のこととして、そのすばらしさを認識していないのではないのでしょうか。自分たちの住む村の魅力を再認識して、自信を持って、心豊かに暮らしていきましょう。

これまで牟礼村でなされてきた都市との交流事業は、いったい牟礼

村に何を残したのでしょうか。村はこれによってどんな利益を得たのでしょうか。そんなことにも触れながら、これから牟礼の未来について考えていきたいと思います。

## 一、牟礼の文化

近世に牟礼村が北国往還の宿場として成長したことは、ふれあい歴史館の展示を見ればわかります。牟礼神社には天正十一年（一五八三）三月に、「信州と越後を往還する人は横道にそれてはならない、牟礼より香白坂まですぐに長沼へ往還するように」と、越後の上杉景勝から禁制が出されています。戦国時代からここは、越後の府中（新潟県上越市）と善光寺（長野市）とを結ぶ街道の宿場として重要だったのです。

JRの牟礼駅、あるいは村役場からそれほど遠くない場所に矢筒城があります。伝承では永正（一五〇四～一二）の頃、島津権六郎が築いたと伝えられています。昭和五四年（一九七九）の緊急調査により、麓にある館跡が発掘されました。現在、飯縄病院になっている場所です。また昭和六十一年の発掘で、内堀は深さが四メートル以上もあるV字形の空堀であることがわかりました。山頂には主郭、二の郭があり、北側は急峻な切岸になっていて、南側斜面には五条の帯郭があり、たて堀なども見られます。

村の南東平出には標高七四四・五メートルの髻山があります、その山頂にも山城があります。平



永正の石地藏

出の城山とか大城おおじょうと呼ばれるものです。頂上の主郭を中心に山の南半分は長野市に入っています。主郭には土塁どるいの跡があり、そのまわりに帯郭、たて堀などが見られます。

こうした山城を見れば、中世、この地に大きな力を持った領主がいたことがわかります。中世にこの地域が生産力を持っていたからこそ、領主が存在し、これだけの城を築くことができたわけです。

中世の牟礼村で注目すべきは、永正四年（一五〇七）三月一日、本阿弥陀仏が父母の供養のためにたてた、永正の石地藏でしょう。長野県にこれだけ古い地藏さんは他にありません。地域の人たちの信仰を考える時、かけがえのない宝物です。字地藏堂にあるこの地藏さんは近くの畑から掘り出されたものだそうですが、鞘堂が建設され、地区の有志の人たちによって「地藏尊保存会」が結成されています。この現在につながる信仰心、そして文化財を保存していこうとする心、これは素晴らしいと思います。

それだけではありません。古いものでいいますと、高坂の字丸山の県営圃場整備事業はじょうせいびで、昭和五二年に緊急調査された丸山遺跡からは縄文時代前期後半の住居跡などが発掘されましたが、縄文早期後半に位置づけることのできる完形の尖底土器が出ています。長野県内としてはじめての発掘で、全国的に見ても貴重なものでした。

その他、この地に残る地名、美味しい食物、家の造り方、言葉、こうした牟礼のすべてが歴史をふまえた文化なのです。

牟礼の特徴の一つは山の文化です。いかに木を植え、育ててきたかも、何を山菜として食べてきたかも、地域の大切な文化であり、私たちはこれらをもっと学んでいかねばなりません。皆さんの先祖の中には宿場で生きていた者もいましたが、宿泊する客を迎えるのに際しては、まず安全が大事でした。安全でない宿屋に泊まる人はいないはずで、牟礼はいかにして平和を維持してきたのでしょうか。宿で提供する食事、燃料、さらに様々な道具などは、どのようにして入手していたのでしょうか。

牟礼は農業の里でもありました。ここでは大変苦勞して水を引いてきました。水を引くのは成功することばかりではありませんでした。平出神社裏や長山などの山麓に、通称「良八堰りやうはちせき」と呼ばれる用水路跡とトンネルが残っています。これは明治一〇年（一八七七）に原田良八が代表者となって野尻湖の水を引いて開田しようとした跡です。しかしながら水利権争論に破れたり、資金が続かなかったりで失敗しました。このように、失敗した先人たちの努力も忘れてはなりません。むしろ歴史では失敗した事例の方が多いのです。

本日この会場に来る前に「よこ亭」でおそばをいただきました。牟礼のおそばは美味しいですね。だからあんなにはやっていて、遠くからも食べに来るんですね。前回来た時にそば粉を買いましたが、そば粉が店頭置いてなくて、店員さんが冷蔵庫から持って来られ、「家に帰ったら冷蔵庫に入れてく

ださい」といわれました。こんなに気をつかいながらそば粉を管理しているのですから、美味しくて当たり前です。こちらで牟礼村産のそば粉を使つて作っている本格そば焼酎「飯縄の風」、これも美味しいですね。明らかに、そばの文化が息づいている里です。

農村と聞くと水田が思い浮かぶのですが、そばを含めて、この村では以前、どんな作物をつくっていたのでしょうか。その栽培において何を注意しなければいけなかったのでしょうか。そういった、皆様にとつて当たり前のことをもつと勉強して伝えていきましょう。

考えてみますと、私のようなよそに住んでいる大学の先生より、地域に住む皆さんの方が牟礼のこととは知っているはずです。そして皆様の知識は生活に根ざした文化です。お互いに周囲の人たちを先生にして、もつとふるさとのことを知るようにならう。それと同時に、この村には大変素敵な人がいっぱいいることをもつと誇りに思ひましょう。必死に地域を知ろうとする郷土史研究家の矢野恒夫先生、文化を支える歴史館の小山丈夫さん、八十二文化財団による交流に際して先生を務めてくれた方々、豊かな役場職員と、人に恵まれていることを忘れてはなりません。

何よりも日本のどこにもある村の景観を自慢したいと思います。「私の村には県宝も何もないのです、ごく普通の当たり前の村ですよ」とお聞きしました。当たり前のことは決して当たり前ではないのです。大きな事件が起きなかったのは、村人が仲よくして、事件を起こさなかったからです。すばらしい建物などがないのも、周囲から搾取<sup>きんしゅ</sup>してくる人がこの地にいなかったからだ、と考えれば

いいのです。皆さんの村は他地域に迷惑をかけたことがないから、今まで慎ましくやってきたのです。皆さんが当たり前だと思うことを、ふるさとの宝だと認識しておきましょう。むしろ何もなかったことを誇りにして、私たちの村は日本でもっとも普通の村ですと、売り出せばいいのです。そうなれば牟礼村は日本の典型、代表となる村だといえます。牟礼は日本一日本らしいところだと、自らに、そして村外の人に訴えていきましょう。

## 二、牟礼の未来

これまで牟礼村を支えてきたのは農業でしたが、今や農業は行き詰まりつつあります。この村においても専業で農家をやっている人は、ほとんどいないのではないのでしょうか。これは経済を優先する現状において、経営規模の小さい山村の農業ではとうてい職業として成り立たないからです。ですから、日本では食糧の約六割も外国産品を輸入しているのです。

これから牟礼における農業は、農業をできることが幸せで、恵まれた場にいるからこそこれができるんだと意識しながら、現状における経済の論理と離れた価値観によってやっていくしかありません。しかし、いつかは経済の論理も追いついてくることでしょう。

考えてみてください。自分でつくった農作物は、農薬なども何が使われたかわかる、安全な食物です。自分の汗を染みこませ、思い入れをこめた作物は美味しいはず。食物本来の味を持ち、安全



牟礼村のリング

な食物を食べることができるのは、現代社会ではもつとも贅<sup>ぜい</sup>沢なことだといえます。都会に住む人が本当の無農薬の野菜を手に入れようとしたら、大変な費用がかかります。しかも、売っている物が確実に無農薬なのかどうか、消費者にはわからないのです。

こうしてみると、農業を行い、自分の食物を自分で栽培することができるのは、土地を持っている者だけが享受できる、大変な特権です。経済的利益を前提にしていたのでは、農業をやっていけないのだとしたら、新たな観点から農業をしていくしかないのです。

牟礼村の農業では果樹園が大きな要素になっており、特にリングは有名です。こうした果樹の未来はどうでしょうか。このままで、若者たちは後継者になってくれるのでしょうか。おそらく、こちらが現況の経済論理では無理でしょう。農民はいつも変わる自然を相手にして、朝から夜まで四六時中働かねばならない上に、汗を流してもそれほどの利益が上がるわけでもありません。もし果樹園を継ぐ人たちがいなくなったら、牟礼村が誇る丹霞<sup>たんかきょう</sup>郷の風景は維持できるのでしょうか。

先人たちは大変な努力をして丹霞郷を売り出しました。つまり昭和七年（一九三二）頃、長野市が近郷の名所を訪ねて市の観光にしようと帝展審査員の岡田三郎助・和田三

造・町田曲江・加藤静完画伯を招いて、桃の花の満開の状況を描かせました。その後、和田三造画伯により丹霞郷と名付けられて名所となったのです。昭和四三年の構造改善事業により、新しい桃団地ができ、本来の場所とはところを変えながらも、丹霞郷は現在も村民の心をいやし、村外からも多くの人を引き付けています。しかしながら、桃を栽培する人がいなくなれば、この景観は消えていくのです。人として、会社などに勤め、他の人の配下に置かれることと、自分が主人公になって自然と格闘することでは、どちらの方が満足感を得られるのでしょうか。経済の論理だけで美しい風景はできません。経済の論理だけを前提にして生活していいのでしょうか。人としていかに生きていくのが幸せかを考える必要があることを、若い人たちに教えなければ、牟礼村の美しい景観も維持できないのです。牟礼村を流れている滝沢川や鳥居川などは千曲川に入り、下流に流れて、信濃川となり、日本海に流れ込んでいます。村内で生み出された水が、他地域とつながっているのです。これまでは私たちが上流で水を汚さないようにして、黙ったまま水の安全を守ってきたのですが、これから先、水を守っているのは上流の我々だと、もつと下流の住民に訴えていきたいと思います。

考えてみてください。私たちは最上流に住むので、安全な、美味しい自然の水を自由に飲むことができます。もしこうした水を都会で得ようとしたら、大変なお金がかかります。私たちが牟礼に住む幸せをここでもかみしめましょう。そしてこの水の源こそ、冬になると皆さんが嫌がる雪なのです。雪の豊かさがたっぷりの水を私たちに提供してくれ、それが農業の豊かさにもつながっているので



す。悪いと思うことが、実は私たちに良いことをいっばいくれている、という二面性を考えるべきです。過疎の問題も悪いことばかりではありません。この広い空間を思うがままに使え、自然と好きなかだけ接しうるのは、過疎の恩恵かもしれません。都会ではこんなに贅沢な空間の使い方はできないはずです。

現代社会が抱える最大の問題はエネルギーです。今や日本の国内で産み出されているエネルギーは江戸時代と比較しても、少ないのではないのでしょうか。かつて日本人が育ててきた薪たきぎを切り、炭を焼くなどの、エネルギー産出の文化が消えようとしています。炭を焼くといっても、使う窯や産出する炭、用いる樹木などにおいて、多くの地域的な差がありました。薪もまた同様でした。エネルギーをいかに産出するかは、地域で育ててきた、独自の文化だったのです。炭焼きや薪づくりの技術をきちんと伝えていけば、きっと今後の役に立つはずですよ。エネルギーの文化は伝えていかねばなりません。今回は炭焼きも交流の科目に組み入れられました。いまだに牟礼村はこうした技術を維持しているのです。エネルギー文化の維持のために牟礼村の果たす役割は大きいのですが、これを牟礼村や村に住む個人の負担だけでいつまでもやっていていいものでしょうか。自分たちの持ち伝えてきたものの価値を、もつとよそに訴えてもいいのではないのでしょうか。こうした文化は日本を守るもつとも重要な保険になるかも知れないのです。とするならば、技術の継承は日本的なレベルで負担を分担していくしかないでしょう。そのためには自分たちの役割を他人にわかつてもらう必要があるのです。

牟礼村の美しい現在の景観は、地域に蓄積されてきた農業技術、林業技術、建築技術など、あらゆるものが歴史的に合体してできました。農業や林業、その他の文化によつてここまでつくられてきた、あるいは維持されてきたこの景観を、これからどんなふうに守り、育てていかねばならないかをじっくり考えなければならぬといえます。こんな美しい水田の景色がよそにあるでしょうか。飯縄山や黒姫山を背後に置いたこの地の風景は、よそに絶対にはないものです。

村の中の地蔵久保には、四月下旬に紅色に咲き誇るオオヤマザクラがあります。これは日露戦争の記念に植えられたものですが、この美しさに魅せられて毎年多くの人が訪れます。この木は経済的な効果をねらつて植えたものではありません。この木が守られてきたのも花見用にして利益を得ようとしたからではありません。このオオヤマザクラに代表される牟礼の美しい木々は、かけがえのないものです。こうしたものは、従来のような経済指標で評価できません。

確かに現況は経済不況もあり、日本全体が大変苦しい状況に置かれています。しかし皆さんは経済のみで、あるいはお金だけで行動しますか。家族のために、あるいは親しい友人のためには、損得を考えずに体を動かすのではないですか。それは家族や友人がお金で評価できない、特別な価値があるからです。

そうした経済の論理を超えて人を動かす原動力の一つに、自らに対する誇りがあります。牟礼村についても、村民が村に対して、村の文化に対して、村の住民に対して誇りを持っておりさえすれば、

自ずから未来が開けてくるのではないのでしょうか。もう私たちはお金、いわゆる経済価値をすべての基準とする考え方から脱却しなければなりません。都会人は金銭を前提とする価値基準を常に押しだし、コモーションリズムによって我々の考えの中にもそれを浸透させようとしています。経済の論理では多くの場合、誰かが損をすれば誰かが得をするのではないのでしょうか。そんな都会の論理をこの地にそのまま当てはめることは、良いことなのでしょうか。

私たちはみんなが豊かになることを期待します。そろそろ牟礼村は、お金や物はないけれども、安全な農作物と水がふんだんで、何よりもすばらしい景色があり、すばらしい周囲の人がいる、これを価値基準のトップにすえるような発想法に転換すべきではないのでしょうか。地域に住む人は、他と異なる地域独自の価値基準を持つべきです。良いものがありながら、これが足りない、あれも足りないと考ええるよりも、あるものの価値をきちんと評価すべきであり、その評価基準も地域独自の物差しを留意しなくてはなりません。

これまで行ってきた牟礼での交流に、都会人は何を期待してきたのでしょうか。おそらく疲れた心がこの村ならいやされる、これだけすばらしい風景はないから、ここに身を置きたい、素朴な人情を味わいたい、ということだと思われます。そうです。このすべてが牟礼村の魅力なのです。一般的な観光地化、あるいは都会化したら、こうした牟礼村の魅力はなくなり、かえって人を引き付けなくなります。

しかし、牟礼村としては一定度の人口を維持していかなばなりません。そのためにはまず、外に出て行く人たちに牟礼村の価値がわかってから出て行くのか、と問いかけることから出発しなければなりません。人にこれを問うことは、皆さんが本当に牟礼村の良さがわかっていることを前提とします。価値基準も先ほど申し上げましたように、皆さんが独自に物差しを持つようにすべきです。

住んでいる人が本当にいいところだと思えば、口コミでこの村の魅力が伝わります。長野市より土地の代金が安いから住んでいるのだ、地域の人たちとは関わりない、といった人たちに無理して牟礼村に住んでもらう必要はありません。ちよつと遠いけれども、長野にも通える、自然もいいし、住民の心もいい、住むんだったらこんないいところはないよ、と自覚して住みついてくれる人を待ちましょう。地域の良さを前提に自らここに住みたいという人とは、文化を共有することができます。

従来のように、観光でも何でもいいから人が来てくれればいい。よそから人が来て住みついてくれないのなら、経済振興は観光しかないといった、見識のない観光は間違いです。主人公は観光客ではありません。村民自身です。村民がいいと思うような村をつくつていかなければなりません。本来の観光は、主人である村民がよそから来る人を賓客<sup>ひんきやく</sup>として迎えてやることであつて、観光客をちやほやしてお金を落としていつてくれるようにすることではありません。本来、お客様がやつてくれば、迎える方にとって経費がかかるものなのです。観光のために投資しても、それで実際に利益があるとは限りません。観光によって利益があるのは、村人全体の中ではわずかな人に過ぎません。それなのに

多くの人が来るようになればゴミが増え、車の渋滞なども起きて、村人全体が迷惑を被ることは十分に考えられます。

金のためだから少し我慢しようという考え方をすると、観光客を迎え入れる側の心も荒れてしまいます。観光地へ行つて、お金もうけだけしか考えない、さもない人に接した経験が皆さんにはありませんか。わずかな利益を求めて、住民の心が荒れるくらいなら、観光地化はしない方がいい、と私は考えます。

### 三、生きる自信

牟礼に住む皆さんはもつと自分たちの持つ文化、歴史に自信を持たねばなりません。

今回の交流によって、農業技術を都会人に教えた人は、自分の力がどれだけあるか、技術を知っていることがどれだけ価値のあることか、実感できたのではないのでしょうか。農業の技術は全国一律のわけがありません。地域の土壌の性質によって、気象の差によって、傾斜地かどうか、水はけがいいかどうか、水を手に入れやすいかどうかなどによって、それぞれ千差万別です。そして皆さんが持ち伝えてきた農業技術は、皆さんの先祖が長い時間をかけて、歴史の結実としてできあがったものなのです。それこそ、もつとも大事な地域文化です。先祖が磨き上げ、育ててきた農業技術を、経済的効率を理由として消してしまつていいのでしょうか。

世界的に見た時、今や農業は最大の武器になります。今皆さんが蒔いているトウモロコシのほとんどは、アメリカにおいて二種類の種を掛け合わせたもので、皆さんの畑で実った種を蒔いても芽は出て来ません。これによって、いったん種を買いはじめると永久に種を買いつけることになります。将来のことを考えるなら、どれだけ独自の種を持っているかが新たな種をつくる財産になるはずですが、気がついたら日本では古い種が消えつつあります。皆さんが昔、この地域でつくってきた作物の種は、どれだけ伝わっているでしょうか。長い目で見たら、地域でつくられてきた地域独自の種を維持することは、かけがえのない大切な文化を守ることなのに、経済の論理、個人の論理ではこれができるのです。

農具も同じです。農業は土壌の性質などによって大きな差があります。したがって、農具も地域にあったものでなければ駄目でした。牟礼には鍛冶屋さんが多くいましたが、彼らは注文を受けて、地域の性格にあった農具を作っていました。今やほとんどの農具は地域性がなくなり、大量生産されたものが全国一律に売られています。古い農具は使い方もわからない状態で、博物館に展示されるだけです。人間にとってもっとも大事なのは生命です。それを維持してくれるのは食糧です。内側から安全な食糧を供給することが祖国防衛の第一歩です。安いからという理由で、栽培の過程でどんな農薬が使われ、輸送するため保存用にどんな薬品が入れているかもわからないような食糧を、目に見えないからといって当たり前前に食べていたのでは、内側から日本人が減んでいきます。地域で地域に

あった食糧を生産する技術、皆さんが持っている農業の知識は本当に大事な文化なのです。

林業技術についても同じことがいえます。今や経済の論理が先行して、山を育てることができなくなっていました。これまで植えられてきた木々も、手をかけて切り出し、製材にしても、外国産の安い木材と競争する力がないからと、下刈りもなされず、間伐もされないで、山に放置されています。山に入ってみればブッシュが生い茂り、風倒木がいつぱいです。今や山は昔のような山ではなくなり、木々が果たしたダムの役割も弱くなりました。このまま木々が駄目になっていけば、保水力がなくなつて水害が頻発します。現状では倒木が倒木を呼び、これまでは考えられなかったような、大規模土石流が発生する可能性もあります。現在も防災のために堤防が造られ、ダムが用意されていますが、それ以上に大事なのは河川の出発点である山です。水害予防には山林の再生が不可欠なのです。

山が豊かでなければ鳥獣も住みません。植林をして放置してしまった山ほど手に負えないものはありません。このままでは生態系がくずれてしまいます。その意味でも山の再生は必要なのです。

これまで外国産の安い樹木が入っているからと、日本の山林は放置されてきました。でもこれは外国からの収奪であることを忘れてはなりません。日本が材木を買い込む背後に、東南アジアなどの樹林が裸にされ、再生が不可能になっている事実を思い起こす必要があります。だいたい遠くから運んできてもまだ安いというのは、よほど安く買い込んできているからでしょう。同じ人間が働くのに、賃金の差が大きいということ自体、おかしいことです。安い賃金ということ自体、私たちが収奪して

いることにならないでしょうか。実際問題としては、日本の材木を使えば値段が数倍になるというほどの値段格差が存在するわけでもないのです。

こういう状況からすると、私たちは日本の山をもう一度再生しなければなりません。そのためにはまず牟礼の山の再生から始めましょう。幸いなことに、この村にはまだ山林の技術が辛うじて伝わっています。

それと同時に、山の大切さを私たちの村から主張しましょう。都会の人は山から遠く離れて暮らしていますので、山のことがわかりません。一方的に都会の論理を聞かされるだけでなく、皆さんの方から都会人に警告を与え、自分たちの価値をわかってもらうようにしましょう。

山の問題はそのまま、我々が都会の水を守ってやっているのだということにつながります。過日、南木曾町の方と話をしました。その人によれば山の中にまで下水道が完備されるようになったのとです。しかし、家の中にひきこむものには二〇〇万円ほど個人の負担が必要になります。過疎化が進んでいて、将来、誰も住まなくなるような老人だけが住む家に、二〇〇万も投資することがいいのか、と考える必要があるとの意見でした。

しかも冬の山の中は寒いので、水洗トイレはある程度、流しっぱなしにしておかねばなりませんから、その経費もかかります。従来の汲み取り式では、維持経費もかからない、というのです。一見すると、都会的な便利な生活を用意してやっているのだということになるのですが、住民からすると大



きなお世話かも知れません。見方を変えると、これで利益があるのは、水が保護される下流の人ではないかとのことでした。山の中の水洗トイレと同じように、進歩と称するものの中には、本当は必要でなかったり、必要以上に経費がかかるものが多いのではないのでしょうか。

上流で水を守らねば、下流は大変なことになります。きれいな水を下流の人たちに利用してもらうために、上流の人たちが日々気をつかい、努力していることを、下流の人たちは知らないのです。圧倒的に水を汚しているのは、下流の人たちで、彼らは上流に対して何の責務も負いません。上流の人たちの努力をもっと主張して、利益を得ている人たちに相応の負担をしてもらってもいいのではないのでしょうか。

水害にならないように、大変なお金をかけてダムを造りますが、日常的にダムの役割を果たしてきた水田には目配りがされません。水田は稲をつくるだけでなく、ダムの役割を果たし、多くの昆虫や小魚のゆりかごでした。ダムに費やす金額のいくらかでも、水田が農業では成り立たないのなら、ダム機能の補助金を出してもよいのではないのでしょうか。上流の水田は下流に水害がないようにダムの役割を果たしていることももっと訴えましょう。

考えてみますと、人類は圧倒的多くの時間を旧石器時代に過ごしました。日本人が稲をつくるようになってから、まだ二二〇〇年か三三〇〇年ぐらしか経っていません。人間の歴史の圧倒的多くは、自然の中で暮らしてきたのです。

また、現代文明の根っこは農業にあります。人間は文明の時代を土とともに暮らしてきたのです。

それなのに、このところ急激に人間は自然から離れ、土に接触しなくなりました。これは異常な事態ではないでしょうか。コンクリートジャングルは、人間生活の場所として決して褒められたものではありません。だから都会人は牟礼を求めるのです。少なくとも都会の子どもたちは、土に触れる機会がほとんどありません。文明が土と接するところから出発したのなら、子どもたちに土を耕す教育をもっとしてやるべきで、牟礼村はそれが提供できるところなのです。

牟礼村の人を含めて、全国の人にもっと自然を認識しよう、と声を大にして叫びませんか。都会人が自然の豊かさを求めて牟礼村に来るのは、時代の流れです。この流れのもとと先を見ながら、牟礼村の未来と、価値について考えていこうではありませんか。

#### 四、子どもたちに何を残すか

それぞれの地域には、地域独特のかけがえのない文化があります。その文化の上に私たちは育ってきました。私たちが今あるのは、地域の豊かな文化の土壌があったからです。牟礼村の農業技術、牟礼村の林業、牟礼村の言葉、牟礼村の食事、牟礼村の獅子舞、これらすべてが文化です。ところがここに来て、こうした地域の独自の文化が、急激に消えようとしています。私たちは過去の文化を消費するだけでは駄目です。これを伝承し、さらに育てていく義務を負っているのではないのでしょうか。



牟礼村の獅子舞

ややもすると地域に伝わってきたことは古いことで、時代遅れで全国に通用しない、新しいものが価値のあることだ、と思われがちです。本当にそうなのでしょうか。私たちは過去の遺産をきちんと受け継いで、批判を加えた上で、これを伝えるのか、伝えないのかを決めているのではなく、何となく時代に流されているようです。

地域の文化は地域において価値を持つことであり、それは地域が地域として存在する大きな原動力になります。もう一度、私たちはしっかりと地域の文化を学び、良い点と悪い点を相対化した上で、未来を担ってくれる子どもたちにそれをバトンタッチできるようにしたいものです。

これまで私たちは、お金をたくさん持つて、物があふれ、便利になればなるほど、幸せになると思ってきました。そして、これを発展と称してきました。しかしながら、今や私たちはお金や物質があるだけで人間が幸せになれないことに気づき始めました。

私たちが子どもだった頃と比較すると、今の子どもたちは食事も良く、衣類も豊富できれいになり、持っている物も豊かになり、教育環境も恵まれています。おそらく世界の子どもたちの中でも、物質的にはもっとも恵まれているといえます。では彼らは、私たちの子どもと比べて、幸せになっ

いるといえるのでしょうか。現在の子どもたちから比較すると、お金も物もない世界に生まれた私たちは不幸せだったのでしょうか。また、日本の子どもたちは世界の子どもたちに比較して、幸せだといえるのでしょうか。どうもそうは結論づけることができないですね。

今の子どもたちには、子どもとしてもっとも大事だと思われる夢がありません。周囲の子どもたちと行動を共にしようという協調精神が欠けています。まわりを思いやる気持ちができなくて弱くなり、自分だけが良ければという、自己中心的な考え方にあふれています。子どもたちの顔に無邪気な笑顔が消えてしまっています。こうした状況を見ると、子どもとして幸せかどうか、私には疑問が残ります。物はなくても幸せという感じは得ることができません。私たちが子どもだった頃にも、様々な場や機会に幸せを感じました。周囲の子どもたちは生き生きとして、輝く目を持っていました。ところが今の子どもたちや大学生は、大志とか夢とかいったものをほとんど持っていません。世界の子どもたちの中で、これほど生き生きしていない子どもたちがいるのでしょうか。

戦後の日本は繁栄してきたのですが、本当だったのでしょうか。ひよつとすると、私たちは大切なものと引き換えに、お金や物を入手してきたのかも知れないのです。

また、私たちは日本の繁栄の背後に、日本人によって収奪された熱帯雨林などがあることを忘れてはなりません。私たち自身が広い視野で周囲を思いやる心を忘れてしまったのです。子どもは実に私たち親の鏡なのです。彼らが幸せでないのは我々の責任なのです。

私たちは今こそ、地域の文化をしつかりと子どもたちに伝えていかねばなりません。それこそ地についた生き方、地についた生活文化ではないでしょうか。現在の子どもたちは過保護だといわれます。親として子どもを保護するのは当然ですが、過保護になると自己中心的な考え方を植え付けます。また、親が何でも面倒を見てくれるため、自らの力で問題を解決し、自らの力で生きていく力を養うことができません。周囲を見ながら一人の人としていかに生きていくか、この社会に羽ばたく時に必要な力が減退しているようです。

今だからこそ、私たちは子どもに、人間も地球上の生命の一つに過ぎないことを教えるべきです。そのために、子どもに多くの生物に接触する機会を与えなくてはなりません。昆虫や動物、植物などともっと接触させ、生きること、成長すること、死ぬこと、私たちが他の生命を奪いながら生きていくことを教える必要があります。こうした教育は、実際に野に出て生物に接触してこそ可能になります。まさに牟礼村はそれが可能な教育の場なのです。

教育をする人には生命に対する敬虔な気持ちが必要です。これまで教育する人の人格があまり問われず、記憶量、本などに対する知識をどれだけ持っているかが重視されてきました。自らが人として立派に生きていくことができないような人を教師にすべきではありません。自己を相対化できないような人には、教育などとてもできません。やはり人として優れた人、実際に生きる力を持っている人から、子どもたちが学ぶ機会を増やすべきです。今回の交流で先生の役を負った牟礼村の人たちは、

そうした能力を持っていました。木や農作物、その他の生き物を相手にし、日々工夫を重ねながら生きていく人には、教師としての力があります。こうした人たちが地域文化を支えてきたのです。皆さんはもつとその力を信じ、誇るべきです。

牟礼村の誇るべきは良い空気と風景、そして素晴らしい知識を持った人たちです。まずは、私たちは自身が美味しい空気や心温まる風景、周囲の人の価値を再認識しましょう。牟礼村の素晴らしい景色は、いかなる絵画よりも美しいものであり、これを他地域に用意しようとしても不可能だということを確認しましょう。ふるさとの変化する四季、直接肌にあたる風、すべてを覆い尽くす雪、これはいくらお金を積んでも、都会では入手できないものです。まさにこれは自然の豊かさです。これを認識したら、その良さをもつともつと子どもたちに伝えましょう。親たちが教育してやらなくては、子どもたち自らでは気がつかないこともいっぱいあるのです。

牟礼村の素晴らしい財産も、放置しておいたのでは消えていきます。この地の風景は時代とともに変わってきました。水田が開かれ、電車が通り、各家で車を持つようになった、それぞれの時期に景観も空気の味も変化してきたはずです。これからおそらく、牟礼村の風景は変化するでしょう。

でも、いつの時代であっても、人間が素晴らしいと思う本質は変わらないのではないのでしょうか。だとしたら、皆さんが素晴らしいと思うものは伝えていかねばなりません。どんな財産も放置しておいたのでは散逸します。財産はもつと豊かにして次の時代にバトンタッチすべきです。そのためには、



緑溢れる牟礼村

牟礼村をもっと魅力あるものにしていくための努力を繰り返さなくてはなりません。それこそ地域の文化づくりだ、と私は思います。

牟礼村の周囲は山に囲まれています。緑の山が宝庫だということを再認識し、子どもたちに伝えましょう。子どもたちは山の中を歩き回る楽しさを忘れています。木々とふれあい、小鳥の声を聞き、時には小動物にめぐり会う喜びを与えてやりましょう。そして木々の名前を、動物の名前を、声を聞かせてくれる小鳥の名前を、どの植物が食べられ、どの植物が危険か、いっぱい教えてあげましょう。

それこそ牟礼村に生きてきた皆さんしかできない教育です。

皆さんは親として、自分が持っている知識をどれだけ子どもに伝えてきたのでしょうか。皆さんが持っている知識が価値あることだと教えずに、学校でテストをしてその点がいいということだけを褒めていいのでしょうか。親がきちんと子どもと接触し、教えることをしないで、子どもに親の価値がわかってもらえるわけがありません。もう学校で教えることだけが学問だ、とする知識偏重の時代は終わりました。人として立派に生きていくことを教えるのは、身近なところからしなくてはなりません。教育者は皆さんなのです。

## おわりに

現在は未曾有の転換期のまただ中にあります。様々な意味で激動の時代に入っています。私たちは新たな未来をつくっていかねばなりません。未来は現在の延長線上にあり、現在は過去の上に積み重なっています。とするならば、しつかり過去を学ばなければ、より良い未来が見えてくるわけがありません。

歴史という学問は暗記のための学問ではありません。今を確認し、今よりもっと良い未来をつくるために、過去を知ろうとする学問です。私たちにとっても大事な今は今であり、さらに大事なのが未来なのです。

いつの時代にも牟礼に住んだ人たちは、ふるさとを良くするために努力を重ねてきました。先祖の苦勞を知らなくては過去の人に申し訳ありません。その努力を忘れず、成功したことと、失敗したことを確認し、どうすればもっと未来が良くなるのかを考えていきたいものです。時代の推移とともに牟礼村の人たちが、何を得て、何を失ってきたのか、相対化して把握してみましよう。

皆さんは子どもに「勉強しろ」といいませんか。いつている本人は子どもより勉強をしていますか。自分が勉強しないで、子どもに勉強しろというのはおかしくありませんか。我々が学問を楽しむ姿を見せてやらないで、子どもが学問を楽しむわけがありません。ふるさとをもっと知ってください。自分で勉強して知ることができたら、知ることの楽しさがわかるはずです。そうなれば自分の知の楽し



さを他人にも伝えたくありません。皆さんはそうして話をしたくなっている周囲の人から、もつと学んでください。学ぶべき人は皆さんの隣りにいるはずですよ。

スポーツでもそうですが、苦勞して汗を流し、日々鍛錬した者の方が、スポーツの楽しさがわかります。汗をかいて苦勞して山に登るから、山頂での景色が特別なものに感じられるのです。学ぶことの努力をしないで、知識を得た時の喜びはわかりません。ただし、知識は持つだけではつまらないものです。活用できればもつと楽しいはずですよ。皆さんの知識を、ふるさとを良くするために役立ててください。

皆さんは、子どもにこの村に住んで欲しい、同居をして欲しいと思いながら、牟礼村の悪口や、自分の周囲の者に対する悪口をいっていませんか。日常的に子どもたちに牟礼村の悪いところを教えているながら、牟礼村に住んでくれといったところで、子どもたちは住むわけがありません。都会はテレビや雑誌、その他のメディアを使って、自分たちのいいところを自己主張しています。それに対して、奥ゆかしい牟礼村の住民は自分たちの文化を、大事な点を、よそに向かって自己主張していません。まずはふるさとの子どもたちに牟礼の良さをしっかり伝えることから出発し、ふるさとに活力を与えていきましょう。

時間が来ましたので、これで終わらせていただきます。